ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「が……ガキ共……ぶっ殺してやる！　ゴローン！」

　男は雄叫びを上げながら、ボールを投げる。中から出てきたのは、まるで巨大な岩のようなポケモン、ゴローンだった。両腕を上に上げると、そこからピカチュウと同じくらいのサイズの岩が現れる。雅也達は、次に何が来るのかを悟った。

「ロックブラスト！」

「フシギダネ、蔓の鞭！」

「ミズゴロウ、水鉄砲！」

　山なりに飛んでくるそれを指差して、二人は叫ぶ。途端、二本の蔓が岩に巻き付きスピードを緩め、勢いよく放たれた水がそれを押し戻した。岩に巻きついていた蔓が解けると、岩は川に落ち、水飛沫を上げる。

　その刹那、太一の頬を銃弾が掠めた。

「あ……あの野郎！」

　男を睨む太一だが、その目にいつもの強気な光は無い。この現状をどうすればいいのか、太一にも分からないのだ。

　銃弾のすぐ後に飛んできた岩を、今度は空中で、ピカチュウの『アイアンテール』とリオルの『はっけい』の同時攻撃が砕く。そのすぐ後の銃弾は、ピカチュウの耳の間を通り抜けた。

「た……太一！」

　切羽詰まったような声で、雅也が叫ぶ。そして、今は川の中で泳ぎ回っているミニリュウを指差した。

「『破壊光線』は使えないのっ？」

「無理だ！」

　太一は、即座に頭を振る。

「もう五発撃っちまった！　暫くは撃てねぇ！」

「ほ……他に技はっ？」

「お……男は黙って『破壊光線』って言うだろう！」

　つまり、使えないということである。一瞬だけ申し訳なさそうな顔をした太一だったが、すぐにピカチュウを指差した。

「雅也のピカチュウは『十万ボルト』とかは使えねーのかっ？」

　岩と銃弾の両方が頭上を通り過ぎたのを感じながらも、太一は聞く。雅也も、太一のように頭を振った。

「つかえな……じゃなくて、使わないんだよ！」

　とどのつまり、使えないということである。ピチューの頃の話だが、ピチューは自分の体から電流を十五センチ以上離すと、あっという間にコントロールを失って、明後日のところに飛んでいってしまう。

　勿論、進化した今、それが解消された可能性が無いわけではないのだが、雅也とピカチュウにはとてもじゃないが、今そんな事にチャレンジする精神的余裕は無い。

「はぁっ？　『十万ボルト』が使えないピカチュウなんて、ルーの無いカレーみたいなもんじゃねーかっ？」

「うっさい！　僕のピカチュウは肉弾戦専門なの！　『十万ボルト』なんて使えなくても、十分強いんだ！」

　不毛な言い争いを始める二人を叱りつけるように、彼等のポケモン達が吠える。その刹那、二人は自分達の間を銃弾が飛んでいくのを見た。

「……」

「……」

　それを目視してしまった瞬間、あっという間に二人は固まる。そんな二人に向かって、本日四度目の『ロックブラスト』が発射された。

「あっ……」

「やべっ……」

　思わず口からそんな言葉が漏れるが、二人の足はんでしまって動かない。見ちゃいけないものを見てしまったが故、体が言うことを効かなくなってしまっていた。二人の頬に、汗がツゥーっと流れる。

　二人がそこを動けるようになったのは、ピカチュウの『雷パンチ』が空を舞う岩を砕いた時だった。

「……言い争いなんてしている暇」

「……ねーみてぇだな」

　二人は見合って、コクンと頷いた。すぐさま次の『ロックブラスト』が飛んでくる中、二人は頭を懸命に働かせる。一歩間違えれば死んでしまうかもしれない状況の中、どうすれば勝てるのか探るように、彼等とそのパートナー達は、敵の動きから一瞬たりとも目を離すことは無かった。

「ピカチュウ、アイアンテール！」

「ミズゴロウ、水鉄砲！」

　取り敢えず、今目の前まで迫ってきている岩の破壊を試みる。その次に銃弾の警戒。男は既にライフルを構えていたので、必ず来ると二人は確信していた。

　だが、男はライフルを構えたまま、銃弾を撃ってこなかった。

「……あっ！」

　それが、撃ってこないのでは無く撃てないことに気がついた雅也は、小さくそう叫ぶ。

「太一！　ミニリュウが『破壊光線』を使えるようになるまで、どれくらいかかりそうっ？」

「た……多分、十五分もすれば一発くらいは何とかなるはずだぜ！　……って、そういうことか！」

　何度も引き金を絞っては首を傾げる男。それを見て、太一も雅也の意図に気づいた。

「いける……いってやらぁ！」

　六発目の『ロックブラスト』が、ミズゴロウの水鉄砲で勢いが落ちて川に水飛沫を立てる中、太一の声が轟いた。